

連綿と続く生命の種

文 井戸 理恵子

毎年11月になると、和菓子店には大豆、小豆、柿や栗などを入れた「亥の子餅」と呼ばれる餅が軒先に並びます。これは本来、旧暦10月（亥の月）の亥の日、亥の刻（午後9時〜11時）にこうした亥の子餅を食べると病気になるという中国の俗信によるものですが、我が国では平安時代に宮中行事として取り入れられました。猪いのししの多産にあやかかって子孫繁栄と無病息災を願い、この餅を供えるのです。

やがて行事は庶民の間に広まります。農村ではこの時期、稲の収穫期にあたります。田の神への感謝と翌年の豊作を祈願する「亥の子」祭、「亥の子」の祝いが行われました。祭では、子どもたちが家々を回り、「い〜のこ、いのこ〜」と亥の子歌を歌いながら、数本の縄を放射状につけた丸石で地面をたたき「亥の子突き」が行われます。この行為は収穫を終えた大地に再びエネルギーを蓄えて来年の英気を養うため、また、作物を食い荒らす土中のモグラを払うためであり、特に子どもたちが無邪気に遊ぶほど、より強い効果をもつとされておりました。

一般に西日本に定着した「亥の子」に対し、東日本には、旧暦10月10日に行われる「十日夜とおかんな」があります。10月10日は、春に山



写真/Aflo

子孫繁栄と無病息災の願いが込められた「亥の子餅」

第五回

そして「とおかんな」。この謎めいた言葉の中にも、先人たちの経験から培われた多くの知見がしたためられているように思われます。

今年の亥の子、とおかんな。自らの中に潜む「種」II「来年の兆し」を見つめ直す機会とと考えていただいてはいかがでしょうか。

から来られた田の神が、稲刈りが終わって山に帰る日。おそらく、亥の子と同じような作用があるのでしょう。やはり子どもたちによる行為が祭の中心です。稲の茎を束ねて作った藁苞わらづつや藁鉄砲で地面をたたきながら歩き回るので。一方、大人たちは刈り入れが終わった田から案か山子かしを持ち帰り、田の神として祀ります。収穫に感謝し田の神を祀るこうした祭は、餅に入れられた穀物や木の実のように、翌年の豊かな実りを約束する「種」を象徴しているかのようです。生まれて、死んで、また生まれるという生命の連鎖の中の「種」。それは十月十日とつきとおかで生まれてくる人の命にもあやかったもの。つまり、十月十日は胎内に宿した新しい命として抱く時間というわけです。また「亥」は、時刻の「刻」から「リ（刀）」を省いたトキを意味するものでもあります。日々刻一刻と刻まれる時間に命の再生を感じとっていたのではないのでしょうか。

いどりえこ／民俗情報工
学研究者。1964年、北
海道生まれ。多摩美術大
学非常勤講師。節句の会
「アエノコト…節句の饗応」
をはじめ、伝統儀礼や風習
の意味を民俗学的に解明
し今に具現化する提案を
行う。著書に『暦・しきた
りアエノコト』日本人が大
切にしたいうつくしい暮ら
し』など。